

西松会新聞

西松会
一橋大学
ア式蹴球部
<http://jfn.josuikai.net/circle/soccer/>

3 年の時に立候補

私は中学から大学までサッカー部に所属していました。正確に言いますと、高校入学後 2 年の途中まで中抜けしていましたが、その最初と最後の 2 年間ゴールキーパーを経験いたしました。大学に入った時にもキーパーを志願しようかと考えていたのですが、2 学年上に中沢さんという素晴らしいキーパーがいらつしゃって、2 年間は試合に出られないと思います、

私はキーパーだった

現在静岡に単身赴任しておりますが、気候温暖・風光明媚なところで取引先や職場の仲間にも恵まれ充実した生活を送っています。

私は現役時代、最初センターバックをやっていました。才能がなく、このままではレギュラーはおろかベンチ入りする可能性も薄い状況でした。たまたまキーパーが 1 人しかおらず、先輩の勧めでサブキーパーをやってみることにしました。自分としても大好きなサッカーを続けるにはこれしか道がないと考え抜いた決断でした。

して早朝サッカー（日の出から 7 時半くらいまで）に参加したりと、長くプレーを続けることができました。

私のキーパーぶりは、技術的には、決してうまいとは言えなかったのですが、ボールや相手を怖がらないところだけに、取り柄があったのかと思っています。

昨年、斎藤大先輩のお誘いで、六〇雀のチームに入れてもらいかけたのですが、アキレス腱を断裂、現在リハビリ中という情けなさです。

竿代 興志
(副会長 昭和 46 年卒)

1 年間の活動を振り返って

代表幹事 2 年目となった 2009 年ですが、この紙面を借りまして、西松会の主な活動を振り返りたいと思います。

〈情報発信〉

最も力を入れたことは、現役の情報

会員の皆様にできるだけ多く発信することでした。特に、秋季リーグ戦は、タイムリーでビビッドな情報をお届けするため、数多くのメールマガジンを発信するよう努力しました。リーグ戦期間中は、土曜は会社、日曜は小平という生活パターンとなったため、家族（特に子供）には著しく不興を買いましたが、会員の皆様にはある程度満足いただける情報をお届けできたのではないかと考えています。

〈名簿の作成〉

また、会員名簿の作成を再開することとしました。久しぶりの名簿作成であり、会員の皆様の連絡先の把握には相当手間取りましたが、最終的には完璧ではないものの名簿としてそれなりに役立つものをお届けできるのではないかと思います。名簿作成の過程で新たにメールアドレスを

把握できた会員もいらっしゃると思いますので、2010 年にはこれまで以上に多くの方にメールマガジンを配信できることになると思います。

総会に風間八宏氏を招いて講演を行っていただくという新しい試みにもチャレンジしました。風間氏の講演は非常に示唆に富むもので、現役部員だけでなく、会員の皆様にも非常に参考になるものでした。今後も、台所事情が許すようであれば、同じような機会を設けたいと思います。

〈財政基盤の強化〉

その台所事情ですが、引き続き厳しい状況にあります。2009 年はかなり納入のお願いを繰り返したこともあり、三百万円の大台を何とか回復することができましたが、次年度への繰越金が徐々に減少していくという傾向は続いています。上記のとおり、西松会をより身近に感じていただけるよう情報の発信等に努めていきますので、ぜひとも会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

こういった活動により会員の皆様に少しは変化を感じていただけたのではないかと思います。西松会を良い組織にしていこうための努力をさらに積み重ねていこうと思います。引き続きご支援をいただきますようよろしくお願いいたします。

代表幹事 樋口 哲司 (昭和 59 年卒)

2 部復帰を逃す、東京都 3 部リーグ戦

平成 21 年度の東京都 3 部リーグは、昨年 8 月に開幕、一橋は 7 勝 2 敗、勝点は 21 と大東文化大と並んだが得失点差で及ばず 3 位に終わった。2 部復帰はならず、来シーズンの昇格を期することになる。

現在サッカー部にキーパー不在とわがががいました。人間の得意な手を使うわけですから誰でも勇気と集中した練習があれば熟達します。現役後輩諸氏の決断と奮闘を祈ります。

奥野 真琴
(昭和 58 年卒、味の素勤務)

平成 21 年度 東京都大学リーグ 3 部戦績表

チーム	山梨	大東	一橋	日大商	創価	東工大	農工大	自由	都留	杏林	勝点
山梨学院	-	2 〇 1	3 〇 0	2 △ 2	4 〇 0	1 〇 0	3 〇 0	2 〇 0	4 〇 0	18 〇 0	25
大東文化	1 ● 2	-	1 ● 2	1 〇 0	1 〇 0	4 〇 0	3 〇 0	6 〇 1	8 〇 1	8 〇 0	21
一橋	0 ● 3	2 〇 1	-	4 〇 3	1 〇 0	0 ● 1	4 〇 2	5 〇 0	3 〇 0	2 〇 1	21
日大商	2 △ 2	0 ● 1	3 ● 4	-	2 〇 1	4 〇 2	2 △ 2	4 〇 1	4 △ 4	7 〇 3	15
創 価	0 ● 4	0 ● 1	0 ● 1	1 ● 2	-	4 〇 0	6 〇 0	4 〇 0	1 △ 1	4 〇 0	13
東 工 大	0 ● 1	0 ● 4	1 〇 0	2 ● 4	0 ● 4	-	1 ● 3	1 〇 0	1 △ 1	5 〇 1	10
農 工 大	0 ● 3	0 ● 3	2 ● 4	2 △ 2	0 ● 6	3 〇 1	-	2 △ 2	1 〇 0	2 ● 3	8
自 由	0 ● 2	1 ● 6	0 ● 5	1 ● 4	0 ● 4	0 ● 1	2 △ 2	-	2 〇 1	2 〇 1	7
都留文科	0 ● 4	1 ● 8	0 ● 3	4 △ 4	1 △ 1	1 △ 1	0 ● 1	1 ● 2	-	7 〇 2	6
杏 林	0 ● 18	0 ● 8	1 ● 2	3 ● 7	0 ● 4	1 ● 5	3 〇 2	1 ● 2	2 ● 7	-	3

から安定した戦いを展開、杏林、農工大、都留文科を降し 3 連勝、さらに当面のライバルと目されていた大東文化にも競り勝ち、勢いに乗った。自由学園も一蹴し弾みをつけたが、第 6 戦の東工大戦で思わぬ落とし穴にはまった。1 人退場のアクシデントにも見舞われ、予期せぬ敗戦。その後、創価を退け、第 8 戦の山梨学院との戦いにすべてをかけた。しかし、山梨の速い攻めに受身に回る場面が多く、次第に守りを崩され、失点を重ねた。

またしてもあと一步の悔いを残した。得点力不足、キープ力と様々な課題が指摘されている。新 4 年生を中心にチーム一丸となった取り組みで当面の目標突破に期待したい。

戦いを終えて

自分を変えられるのは自分だけ

2009 年 10 月 4 日、私はこの日を一生忘れることはない。秋季リーグ第 6 節東京工業大学戦、私は退場となった。それまでチームは 5 連勝しており、これ以上ない結果で波に乗っていた。その流れを私はたった 1 プレーで壊してしまった。愚の骨頂である。チームはこの試合敗戦し、秋季リーグ全体は 7 勝 2 敗の 3 位。今期も 3 部残留に終わった。

サッカーはチームスポーツである。故に個人が結果の全てを左右するということはない。しかし、あの試合、あの瞬間、私があのような愚行を犯していなければきっとチームは 2 部へ昇格したに違いない。残留の原因のひとつは私にある。

昨年のシーズンインの時、私は 2 部昇格の

ためなら全力を尽くすと覚悟していた。それは昨年に限ったことではなく、毎年決心していることである。ただ最後の 1 年にかける思いというものはこれまでの 3 年間の比ではなかった。あの瞬間までは。あれ以降、自分がした覚悟が、こんなに浅はかなものだっただかと思うと、自分に対してとても腹が立つ。チームメイト、応援して下さった O B の方々にどのようにして償えばよいかわからないでいる。

昨年は三商大戦の際に、関西西松会の方々にも直々に応援の言葉を頂いた。私はその場で 2 部へ昇格したらもう一度、お会いして祝勝会をやりましようと言ったことを覚えている。それを自分自身で台無しにしてしまつて、後悔の念で一杯である。佐竹様、柴田様を始め

過去の習慣を断ち切る勇気を

私は 2009 年度、グラウンドマネージャーという役割を担つて、チームの指揮を執った。この経験は非常に貴重なものであり、多くのことを学んだ。ここではその中の一つについて述べようと思う。

それは、過去の習慣に従うことによる組織の墮落である。当部には私が入部した時からチーム関連のものや戦術的なものなど多くの習慣や規則が存在していた。もちろんその中には合理的だから受け継がれているものも多々あるが、ただ単に「いままでそうだったから」という理由で受け継がれてきたものもある。しかし、時代は常に動き、サッカーのスタイルだって 10 年前とは別物である。全てを変える必要などない。しかし、このままでいいという意識が部員の中に広まりすぎていることが問題である。

確かに、今までやってきたことというのは部員たちに浸透し易いので、それを意思決定する者にとつても受け入れる側にとつても非

め、関西西松会の方々、あのときの激励の言葉を結果に結びつけられず、大変申し訳ありません。

4 年間を終えて感じたこと、後輩に遺しておきたいことを少しだけ書きたいと思う。こんな私が 4 年間部活を全力でやり遂げて感じたことは、「自分を変えられる者は自分しかない」ということだ。いくら他人から努力しろと言われても、それをきくかけとして本当に変わることができたものは 4 年間で 1 人もいなかったように思える。やはり自分の中で本当になる覚悟がなくては、そのままで 4 年間はあつたという間に過ぎてしまう。4 年間部活をして何も得られなかった、という後悔は絶対にしないで欲しい。

最後に、この一橋大学ア式蹴球部は他のどの大学のサッカー部よりも素晴らしい部活であつたことは間違いない。仲間と過ごした時間、みんなで分かち合つた勝利の喜び、それら全てが最高であつた。もうこの時間が終わつてしまつたことが本当に寂しい。これからは O B として、この最高の部活を支援していくことが私たち 4 年の役割であると思う。いつまでもこの一橋大学ア式蹴球部が素晴らしいサッカー部であることを願うばかりである。

阿部 真琴（主将、4 年）



リーグ戦 対山梨学院 攻め込むも得点ならず

「東京で一番元気なチーム」

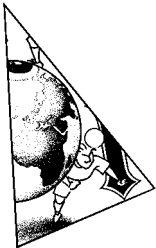
シーズンインの時に、私がチームの目標として掲げたのが「東京で一番元気なチーム」になることでした。

これは、「勝つから楽しい」と言う絶対的なものに対し、「楽しいから勝てる」と言うある種の理想を信じたからでした。

秋季には、チーム一丸となつて勝利を迎える素晴らしいチームになつていたいと思います。苦境に立たされた創価戦での勝利はチームみんなで奪い取つたもので、しびれるものがありました。

しかし、昇格できなかった私達は間違つていたわけで、後輩のみんなには昇格できるよ、よりよいチームにしていつて欲しいです。大学 4 年間、サッカー部という世界が全てでしたがその世界はとても楽しく、居心地が良く、たくさんのことを学ばせてもらいました。関わつた全ての人に「ありがとうございました」。

砂子 達也（副主将、4 年）



「No bird soars too high, if he soars with his own wings.」

昨シーズンは本意ながら 2 年続けて昇格を逃す結果でしたが、学生選手達へは「あと一步のところで結果は残念だけれども良く戦つた。この経験を活かして足りなかつたところを補えば来シーズンは昇格できる」といった温かい励ましの言葉も頂いていま

す。しかし、来シーズンの 2 部昇格にとどまらず更に上を目指していく意識がなければ、知らないうちに 3 部の「ぬるま湯」に浸かつた「負け犬」にならないとも限りません。

そこで、ふと頭に浮かんだのがタイトルにしたある英国詩人の言葉で、「自分の翼で飛ぶ限り、どんなに高く舞いあがつても良い」などと訳されています。中学生の頃に初めてこの言葉に触れ、なぜか強く印象に残つた

歴史を刻む取り組みを全力で

2009 年 10 月 25 日をもって、3 年間所属した一橋大学ア式蹴球部を引退しました。この 3 年間、辛かつたことも苦しかったこともたくさんありましたが、その一方で部活をするのが楽しくて楽しくてたまらなかつた時、言葉では言い表せないほどの感動を味わつた時など、私にとつてかけがえのない財産となつている時もこの 3 年間に つまづいて

ことは間違いありません。サッカー部を支えてくださった O B の方々をはじめ、先輩方、後輩の皆には大変お世話になり、心から感謝しています。

特にこの 1 年間、最上学年のマネージャーとしてチームに所属させていただき、感じたことを以下に書こうと思います。

先日の追いコンでも話に出たことですが、私は部員全員がチームのことを誇りに思い、「チームのために自分には何ができるか」ということを主体的に考え、行動に移していくことがよいチーム作りにとって必要不可欠なことだと思っています。チームの勝利をいかに自分の行動と結びつけることができるか、逆にチームの敗北をいかに自分のせいだと感じるかができるか。こういったことは実際に

記憶があります（今にして思えば、当時の純粋な向上心が刺激されたということなのでしょう）。

翻つて、例えば「東京都 1 部まで昇格して定着する。そして何年かに一度は、関東リーグ昇格を懸けた大会に出場できるチームになる」という目標は、自分達の方で到達できないほど高いものでしょうか。勿論、技術・戦術レベルのみならず精神的な強さを一段も二段も上げなくてはならない筈です。また、スポーツ推薦で選手が入ってくる

訳ではない、専任のコーチから本格的な指導を受けている訳ではない、専用とはいえ人工芝の良いグラウンドではない、等々も、強くない言い訳、として出てくるのでしうが、少なくとも 3 部から昇格できない理

にプレーするプレーヤーだけでなくチームを支えるマネージャーにも求められることだと思ひます。チーム運営の主体となる 4 年生だけでなく、自分が勝つチームを作るんだ！という意識を部員全員で共有し、それに基づいて行動があれば、きっとプレーヤー・マネージャー全員が部活動をしやすい環境が整うと思ひます。そこで手にした勝利を部員全員で喜びあえることは、本当に素晴らしいことです。

チームと真摯に向き合い、主体的に考え責任のある行動をすること。1 回 1 回の練習が週末の試合の勝利に結びつくように、1 人 1 人が集中して部活に取り組むこと、小さいことかもしれませんが、そういったことからよりよいチームは作り上げられると思ひます。

一橋大学ア式蹴球部の歴史を直接刻んできけるのは現役部員のみです。その誇りと責任を持つて、今しかできない「部活」というものに全力で取り組んでほしいと思います。そして来年こそ、部員全員の手で 3 部優勝・2 部昇格をつかんでほしいと思っています。

大橋 智恵美（マネージャー、3 年）

由になるとは私には思えません。

実際、最近では天皇杯予選で 2 回、それより少し前に新人戦で 2 回、3 位または準決勝進出があつたと記憶しています。いずれもトーナメント戦とはいえ、強豪チームに数回続けて勝つた結果であり、リーグ戦でいえば 1 部上位に相当する成績を残したことが一度ならずある訳です。

引用したような詩で「鳥」は想像力の象徴として使われるそうです。3 部に浸つた現状に囚われることなく、4 年間で到達できる最も高いレベルまで学生選手達が想像力を広げられるならば、ここから数年を強いチームへの通過点にできるのだと思ひます。

監督 赤星 真一（平成 4 年卒）

OB 観戦記

グラウンドの外でも 時間を使っていますか!?

最近は何年数試合秋季リーグ戦を観戦するのみですが、今回せっかく機会を頂きましたので、「今なお思うこと」について、当時の反省も含めて一つだけ申し上げたいと思います。

学生時代は、目の前に何不自由なく使えるグラウンドがある強みを生かして、とにかくガンガン走って、ボールを数多く蹴ることで上手くなれる、強くなれると思っていました。しかし、その後『勝利』の引き寄せ方には、もう少し一橋流の味付けがあったと考えるようになってきました。

大学卒業後、東大、京大等の体育会の仲間達と話をすると、彼らがグラウンドでの練習以外にも、チームや小グループで費やす

時間が思った以上に長いのに気づかされました。チームや組織としての攻め方、守り方、決まり事等を議論し、意思統一する時間が、公式・非公式を問わず少なくなっているのです。チームの特長や「カラー」を踏まえた戦い方等を共有化して、個々人の能力の単純合計以上にチームとしての総合力を高めるような取組みに時間を割いています。

最近、技術、身体能力に劣る岡田 Japan が「W杯ベスト4」を目標に掲げています。これはある意味、チームに合った戦略、戦い方を徹底し貫くことで強豪チームに勝つことも可能と言っているのでしょう。また、先日ブラインドサッカーのアジア選手権を観戦しましたが、サッカーの質が想像以上に高いのに驚かされました。目が不自由であるというハンディを、様々な戦術や決め事等を高度に徹底しチーム力で補うことで、プレーの質が高くなっていたのだと思います。

技術に優れ経験を積んだ選手が必ずしも多いわけではない一橋サッカー部が、強豪校と互角以上に戦い続けるためには、グラウンドの外で時間を費やすこと、またその費やし方が非常に重要だと思っています。今も秋季リーグ戦を観戦する際は、自分たちが効果的な話し合いが出来なかったことを反省しつつ、「今年のチームはグラウンドの外でどのくらい時間を費やしたのかな?」そんなことを考えて応援しています。

星野 毅
(昭和63年卒、みずほ銀行勤務)

競り合いと シュート力に心血を

現役諸君は2年連続してタッチの差で2部昇格を逸し悔しい思いをしていると思います。勝負というものは、仮令内容的に僅差であっても勝ちと負けが明確にされる悲情なものです。然しながらこれにくじけず敗戦の原因を真摯に分析し、心技体の向上に努めれば、必ず栄冠を手にすることが出来ます。

ところで現役諸君の試合を観戦し、感ずるところを何点か述べたい。
第一の点は1:1で負けないことである。サッカーがボールを奪い合い相

シルバーOBの感戦記

昨年も小平へ6回通い都3部リーグ戦を観戦したので、その感想文を綴った。

戦前の予想としては、選手強化に踏み切った山梨学院大は格上として、2位は同格レベルの上位4強の争いとなり、長丁場での運と執念を持続できたチームが昇格を勝ち取ると読んでいた。

結果として現役は3強との対戦で全て1点差を守り切り、粘り強く競り勝つ大健闘を果たした。ところが第6戦で格下と見ていた対戦時ブービーの東工大に、慢心という緊張感の緩みからかまさかの1点差の取り零しで3位となり昇格の夢は潰れた。

一昨年に続き昨年も「あと一点」で昇格を逃したが、両年度共1・2位校と比べると同じ3部ながら得点は約半分強で得点力不足は以前から指摘されていた。そういえば、ここ数年の試合運びを見てみると、繋ぐサッカーに固執するためか足元へのショートパス、安易なバックパスなどが多く、リスクを伴う精度の高い得点圏へのパスでチャンスを作ろうという共通の意識が薄いように感じられた。

球技とは技術と戦術を練り上げて得点を競い合うスポーツである。「あと一点」をどうするかではなく、王道は戦術的にいくつかの得点ルートを全員が共有し、ゲーム中繰り返しトライすることにより結果として得点が付いてくるといことだろう。

その方策とは私見を述べれば次の通りである。

(1)裏へのパスによるセンター攻撃 (2)サイド攻撃 (3)セットプレイからの得点 (4)積極シュート (5)DFの大きなクリアー・ロングパス (6)上記のための個人技と連携プレーの練習

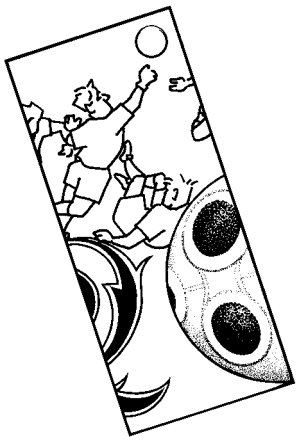
実は得点力不足については2年前の本新聞への寄稿文と略同じで、改善されないまま時間だけが過ぎたことになる。

事程左様に戦術の転換や意識の切り替えや練習内容の充実が現役にとって荷が重いのであろう。なんらかのサポートを促しているようにも思える。

西松会として、現役の部活動の自主運営を尊重しつつ、セミ同好会的にならないよう及ばぬところは年度初めに基本戦術と練習内容についてアドバイスを新しい取り組みを提案する。

現役部員が持てる能力を発揮し、勝負の駆け引き・厳しさ・喜びを体感するよう55年前を回想しながら切に願うものである。

志摩 憲一(昭和31年卒)



クリエイティブティとは

今回せっかく寄稿の機会をいただきましたので、現役部員個々人そしてチームが強くなるための参考になればとの思いで、「コミュニケーション」に関するエッセイ(抜粋)を紹介させていただきます

【クリエイティブティは否定のプロセスにある(建築家 隈 研吉)】

我々の思考には、経験に基づいて何かを生み出そうとする力が働くため、どうしても過去に縛られる。しかしクリエイティブティ(創造性)は、過去の経験を超えようとする意志の産物である。

(中略) 目の前の現実を自らの五感で感じ取り、咀嚼することこそ、クリエイティブティの出発点である。現実とは、常に人間の思考を先行している。

(中略) ただし、これら二つのプロセス(紹介者注:「生の情報をつかむ」「対話を重視する」)

Rizik(Risk)(英)

「リスクを冒して攻めないと、何も得られない。人生と一緒だ。トライしないと何も生まれぬ」(2006年9月 Rizik Osm)

思わず膝を打つ。それは、自分自身が人生においてリスクを冒していないことの証しなのかもしれないと思いつつ。

「2010年2月」

キリン・チャレンジカップ

日本0-0ベネズエラ

東アジア選手権 日本0-0中国

たった2年でこんなにも変わってしまったものなのか。何かを忘れてしまったかのようになジャパン・ブルー。

「家を建てるのは難しいが、崩すのは一瞬。サッカーもそうでしょう。攻撃的な良いサッカーをしようとする。それは良い家を建てるよとする意味。ただ、それを壊すのは簡単です。戦術的なファウルをしたり、引いて守ったりして、相手の良いプレーをぶち壊せばいい。作り上げる、つまり攻めることは難しい。でもね、作り上げることの方が良い人生です。そう思いませんか?」

る」を成し遂げるためには、己の満足のためではなく、「相手の満足のため」であるという姿勢が欠かせない。かつてダグラス・マッカーサーは「相手の身になって考えられない人間は、戦うことなどできない」と述べた。(中略) クリエイティブティと自我を押し通すことを履き違えてはならない。クリエイティブティとは単なる才能やひらめきではない。自分の発想を「形」にし、それを他者と共有する才能、すなわちコミュニケーション能力の別名である。

(中略) 否定されたら「なぜ否定されるのか」を徹底的に考え抜く。さらに自分を否定してみる。考えに考え、ぶつかり、跳ね返され、否定を乗り越えた時、互いのプラス面が引き出された新しいアイデアが必ず生まれる。

(中略) 重要なのは、否定のプロセスで生み出されたアイデアを、自分も相手も「自分が生み出した」と実感できることなのだ。

(平成5年卒、東京ガス勤務)

三枝 正人

(2005年5月 Ivica Osim)

「2010年ワールドカップ 欧州予選」

セルビア、スロベニア本選進出。ボスニア・ヘルツェゴビナ、プレーオフ進出。クロアチア予選リーグ2位。内戦終結から10年。散り散りになりながらも、何かを取り戻しつつあるように見える東欧のブラジル。

「2009年秋」

東京都大学サッカー秋季リーグ

一橋大学 0-1東京工業大学

恐らく、忘れられない悔しさだったろう。一橋大学にとって、そして、卒業していく4年生にとって。でも、取り戻せない悔しさじゃない。二十歳前後の君達にとっては。家のレンガを一つ一つ積み上げていくようにトライしていけばいい。忘れちゃいけないのは、リスクを冒すためには、それを冒す勇気が湧くだけの日々の準備を積み上げておく必要があるということ。

「かきう我々年寄りも、頑張らないとね。不惑を過ぎたが、まだまだ今暫くは、お前らごときに負けるわけにはいかない。(えへへ)」

(平成元年卒、三菱東京UFJ銀行勤務)

金谷 斎



若手から超古手まで多彩な顔ぶれのOB戦 (東京・巣鴨)

海外通信

英国

「ナマは燃える」と ロンドンで観戦三昧

昭和54年卒イモケンこと佐藤博子です。
私の一橋ア式蹴球部は、汗と泥にまみれた45人に会った'75年9月の小平が始まりでした。'76秋関東2部7位に終り入替戦に敗れて降格、空も泣いた秋雨の駒沢競技場と、4年の秋'78都2部で優勝し1部昇格の重圧からの解放の安堵で泣いた小平の情景が今も鮮やかに甦ります。
卒業後はクライフやマラドーナの来日試合、今や恒例の対東大OB戦に顔を出す程度でした。が!!時は流れ'04年末から英国に駐在、極端に短い日照時間中も雨という陰鬱な2度目の冬が明けた'06年、同期のテッ

タイ

ホームページで 戦績をチェック

昭和63年卒の高橋政博です。学部は商学部ですが、西松会の方々同様、小平での生活が中心でしたため、一橋大学サッカー部を卒業したと思っています。現在は、タイに駐在中で、母校サッカー部の動向はリーグ戦近くになりますと、やはり気になり、ホームページで動向を逐一チェックしております。また、同時に、帰国時には必ず、リーグ戦を拝見させていただいています。
ちょっと振り返りますと、やはり印象的でしたのは、いずれもリーグ戦ですが、3つあります。まず、昭和61年、北山さん（現在 Moody's Japan 社長）を擁し東京都1・2

なつても基本はイケメン！とスピードに満ちたクリエイティブな選手ファン。チームを問わず、私の Joe Cole、自分に正直な Drogba、可愛くてしびる Torres、若いのに渋い Fabregas、イケメン代表 Kranjcar、職人 Kuyt・・・と形容詞つきで観戦に力が入ります。

この気の多さを保ち、帰るまで存分に発祥国のサッカーを楽しんでおきます。
帰国後は、幹事を任命されている（25周年トランプで負けたため）卒業30周年の会、駐在延長で遅れた分、みやげ話が多すぎて同期の皆は迷惑がかるかな？

（昭和54年津田塾卒、ゼロックス勤務）
（同期生の注：イモケンの由来は同じ「佐藤」で入学時4年だった佐藤健太郎さんの妹のようだという事で健太郎の妹イモケンとなりました）



（ロンドン名物マダム・タッソンの元チーフ・ソニー・モウリー）

部対抗戦で優勝したものの（ここ25年では最強のチームと思われ）2部秋季リーグ戦では6位、そして、昭和62年の寺田さん擁するチームで何とか2部に踏ん張れたこと（伝説を紡いで頂きました）、最後に、昭和63年の星野くんのおとときにあと一歩のところまで1部へ行けそうだったこと（立教、帝京に勝ったものの、明学、亜細亜、玉川との引分けで結局、2部秋季リーグ3位）でした。
未だに、あのとき、あれをしていればとか、これをしていればとか、後悔ばかりしています。あの時に戻ることができれば、ドリブルでは切り返さないで、振り切っていたらとか、シュートをふかさないで、走馬灯のようにあのときのシーンが蘇ります。やはり、現役の諸君もこれから社会の一員となつて、生活していく中で、かならずや、大学時代でのいろいろなサッカーでの悔しいシーンが思い出されることと思いますが、いろいろな意味ですばらしい経験を小平のグラン

中国

中国ビジネスの 最前線に立つて

現在私は中国北京市に駐在しています。中国が凄まじい勢いで経済発展を遂げていることは皆さん既にご存知だと思いますが、中国のGDPが2010年に日本を抜き、更に2026年には米国も抜き世界一にやらんとすることもご存知でしたでしょうか。世界一ということ言えば、粗鋼、石炭、セメント、化学肥料等二〇種類の工業製品生産量や、自動車販売台数、CO2排出量等も世界一です。因みに、私の任務は、中国に於いてCO2排出削減案件、所謂排出権案件を開発することです。又、金融機関の株式時価総額でも中国工商銀行が世界一です。最早、日本を中心としたビジネスの中に中国を位置付けることは時代遅れであり、中国を軸にビジネスの展開を考える時代になってきました。

さて、そんな中国での生活ですが、皆さんはどんな想像をされるでしょうか。共産党による一党独裁から、何となく怖い、ストレスの多い生活を想像される方もいらっしゃるかもしれませんが、基本的には非常に快適です。私の住んでいるマンションでは、日本のテレビ（地デジ・BS）も全て on time で視聴可能なので、ついこの間までは浦和レッズの余りの不甲斐無さによくテレビの前で腹を立てていたものです。おいしい寿司を食べることも出来ます（おいしいラーメン屋はありませんが）。中国人の対日感情も一般的には良好です。日本人は勤勉とのイメージが定着しており、SONY、トヨタ、資生堂等は憧れの一流ブランドです。又、海外旅行先としても日本は人気です。

皆さんも機会がございましたら変貌著しい中国を是非ご自身の目で確かめて下さい。北京にお越し頂ければ本場北京タックにご招待させて頂きます。
（昭和63年卒、伊藤忠丸紅鉄鋼勤務）

サウジアラビア

海外赴任先でも 欠かさずサッカー

こんにちは。平成13年卒の朝倉俊明といます。パナソニックの駐在員として、サウジアラビアに赴任し、1年8ヶ月が経ちました。私の赴任している街はジェッダという、サウジアラビアの西部に位置し、紅海に面した都市です。古くから商業都市として栄え、また、イスラム教2大聖地であるマッカ・マディーナの玄関口として毎年多くのムスリムが訪れる都市でもあります。

実際に赴任するまで一度も足を踏み入れたことがない国だったので、最初は私も不安を隠せませんでした。街は意外にきれいで、ずっと発展しています。街にはハイパーマーケットが立ち並び、有名ブランド品や食料品が豊富にあります。また、マクドナルド、スターバックス、IKEAなどの外国資本の店もあり、日本や諸外国とそんなに変わりません。ただ、お酒や豚肉が買えなかったり、お祈り中には町中すべて

米国から帰国して

節目の10年、 初めての部下

2010年は卒業して10年目になるので節目の年と言えます。近頃、入社以来、初めて部下ができて雑務に追われることがなくなつたと喜んでいますが、部署内でも中堅的な位置づけとなり政策的な判断にも意見が求められることが多くなりました。この10年の間に、海外に駐在したり結婚したりといういろいろなことがありました。残念ながらサッカーとは疎遠になるばかりで、今では自らプレーすることはなくなつたにリリーグを観戦したり現役世代の結果報告に一喜一憂している程度です。
（昭和60年卒 三菱商事勤務）

の店が一時的に閉まつたり（お祈り時間のため店を閉めなければならぬ）、女性は外出時にはアバヤという黒いマントをまわなくてはいけなかったりと、ちょっと（だいたい）違う点もありますが。

そんな中、サウジで人気のスポーツといえば、圧倒的にサッカー。みんなサッカー大好きです。昨年10月、ACL準決勝で、ジェッダをホームとするアルイティハドとの試合のために名古屋グランパスが来訪したときも、大きな盛り上がりを見せました（余談ですが、試合後ランパスサポーターが観客席を掃除してから帰ったということが、サウジの新聞で絶賛されていました）。

お酒もない、エンターテイメントもない国ですが、私もサッカー仲間を見つければ、週に一度はサッカーをやっています。前回の赴任地であるイギリス、シンガポールでもサッカーチームに入り、仲間と支えあいながら赴任生活を楽しみました。サッカーはまさに世界共通の言語、今後も一橋サッカー部で得た財産に感謝しつつ、地元の方との交流を深めていきたいと思います。

（平成13年卒、パナソニック勤務）
朝倉 俊明

働き始めたのですが、彼は昨年4月に入社した新入社員で、実は同じ大学なのですが（残念ながらサッカー部ではない）、なかなか理解力があつて助かっています。当然対外的な折衝はこれから経験を積んでもらうことなのでスムーズにはできませんが、社内的な仕事、たとえば内部資料の作成を指示するとそれなりのものが出来上がってきます。自分が新入社員のとときにここまでできたかは正直疑問です。また、早く一人前になつてもらうことを目的にどちらかというと厳しく指導していますが、へこたれることもなく、逆にそれを受け止めてより良いものを求める姿勢が感じ取れ感心しています。『最近の新入社員はゆとり教育の影響で……』ということをよく聞きますが必ずしもそうではないのかも感じている今日この頃です。

（平成13年卒・クラレ勤務）
長田 健一

ユース育成がすべてを決める

～日本サッカーの課題～

松 永 隆

（昭和58年卒、日本サッカー協会国際部部長）

私がサッカー協会で仕事をするようになって、早いものでもう6年が過ぎました。

今回原稿の依頼を受けて、サッカー界にとって大事だと実感していることで、あまりマスメディアに出ない部分を紹介できたらと思います。拙文を寄稿させて頂きました。

世界のサッカー界の競争はユース年代の育成の優劣で勝負が決するといつてよいと思います。これがこの原稿のテーマです。

1. ユース年代代表の成績でその国の強さが決まる

御存じのように現在のFIFAランキング1位はスペインですが、過去10年間のU17、U20 W杯でのスペイン代表チームのプレミアの質の高さと成績はそれを裏付けています。

スペインに限らず、過去10年間のU17、U20 W杯のベスト8に入り、しかも質の高いプレミアをしてきた国が現在のFIFAランキングのトップテン入りしているのが実態です。（只早熟でユース年代では強いアフリカ勢はまだトップテンには入っていませんが）

私がサッカー界に身を置くようになって驚いたのはU17、U20、オリンピック、W杯が終了すると数カ月うちにFIFA及び参加国各国の大会分析レポートが完成し、あつという間に10代のエリート育成の現場の指導方法に反映されていくスピードです。

資金、人材ともに豊富な強豪国サッカー界だけあって、その対応の早さと徹底の仕方は、他のスポーツの比ではないというのが率直な感想です。

2. 土台となる裾野の広さ

さらにもう一つ顕著なのはサッカー人口の裾野の広さをもっていないと勝負にならないということです。草の根のサッカー人口が小さい国

ける場を用意し続けることが必要になります。日本の場合すべてにおいて、まだまだ道半ばと言わざるを得ないと思います。

ところが、ユース年代の育成競争で8割がた勝負がつくというのが、世界のサッカー界の実態ではないかと思っています。

フル代表になってからできるのは、ベストの選手を選び、戦術を徹底し、チームとしてよく良く機能させることだけで、ある意味代表監督がやれることは限られています。8割出来上がっている土台の上に残りの2割ほどのような建物を建造するかというのが代表監督の仕事と言えるのではないのでしょうか。現職の岡田監督の苦勞が想像されます。

4. 強豪国とのユースレベルの比較

さてユースレベルにおいて日本の選手とヨーロッパ、南米強豪国の選手を比較した場合、コート陣の間ではおおよそ以下のことが認識されています。

「日本の選手が互角に渡り合える要素」

選手の足技の豊富さ
ボールをもちうための動き出しの技術
チームコンセプトに対する個々の選手の理解の早さ
走力

「まだ追いつけていない、或いは逆に差をつけられている要素」

パススピード
ハイプレッシャーの中でもハイスピードのパスをきちんと止め、即座に振り向く技術
フィニッシュに持つて行く果敢さとフィニッシュの精度
ゲームの中の駆け引き、展開を読む、即座に戦術をチームメート共有する力

これを可能にする試合中の選手間のコミュニケーションション能力
フィジカルコンタクトの強さ、ハイプレッシャーの中での体の使い方
（体の大小の問題ではない→スペイン、アルゼンチンの選手は日本の選手と同サイズ、要は体の使い方の巧拙の問題）

世界レベルでは上記の一つ一つにおいて8歳～16歳までの育成過程で強豪国に並ぶぐらい

にならないと対等に戦うのは難しいと言えます。

ユース年代では 従来のドイツ、フランス、オランダ、イタリア、スペイン、ブラジル、アルゼンチンなどだけではなく、近年はアフリカ勢、東欧勢、メキシコ、スイスなども台頭しています。特に昨年行われたU17 W杯で優勝したスイスはヨーロッパのユース大会でも好成績を収め続けているのにわかに注目されています。

サッカーというスポーツは世界で最も競争の激しいスポーツです。

各国が人、物、金、叡智をつぎ込んで、裾野を広げ、より多くの才能を持った子供たちを育て、またサッカーを経験し、サッカーを支えてくれるファン層を厚くしていく競争とも言えます。

5. 日本の改革

そういう環境の中、ユース年代で強豪国と対等に戦えるようになるために、FIFAは47都道府県のサッカー協会と協力して以下の改革に着手しています。

○各県、各地域の公式戦を、ノックアウト方式からリーグ戦方式に転換すること。

各年代でリーグ戦化を実施できた都道府県協会にはインセンティブとして補助金も交付しつつ、ノックアウト方式からリーグ戦方式への転換を図っています。

毎週が公式戦という文化を浸透させ、ゲーム↓分析↓トレーニング↓次のゲームというサイクルを選手皆が10代で経験するためです。我々が中学、高校時代に経験した、強豪校以外は年間の公式戦が数試合という悪しき習慣を駆逐しなければ、ゲームを通じた技術、戦術のレベルアップ、選手自身がゲームの展開を読んで、戦術を変えていくトレーニングなど

はできるはずがありません。

またノックアウトばかりやっているとどうしても守備重視の戦術をとるチームが増えます。全国中学校選手権などを見ると、チームによつては試合中一度もハーフウェイラインを超えないディフェンス

の選手がいて、ベンチからは「ボールが来たら、とりあえず蹴つておけ」という指示が飛んでいるというのが、いまだ日本の悲しい実態です。その方がミスで負けるリスクは減りますが、選手にとつて一番大事な時期にそんな事をやらせていては、絶対にいい選手は育ちません。

○12歳以下では全国大会も含め公式戦を7対7 或いは8対8のスマールサイズゲームに転換すること。

日本では小学生の公式大会も長年フルコートで行われてきました。

但し、フルコートだとしても早く身長が伸びた子がフィジカルだけで他を圧倒しがちです。またこの年代で二番重要な試合の中で選手のボールのタッチ数があり多くなりません。さらにスペースがある分、小学生の走力ではプレッシャーもゆるやかで、多少のタッチミスでもミスに見えない傾向にあります。

このようなマイナス面を解消し、より良い育成環境を整えるため、小学生年代は全国大会も各県、地域の大会もすべてスマールサイズゲームへの転換を図っています。またそれ以降10代後半までスマールサイズゲームの大会を増やそうとしています。

それによりハイプレッシャーの中でプレッし、決定的なシュートチャンスを数多く経験させることができます。スマールサイズゲームでデータをとるとチーム当たりのシュート数がフルコートゲームの4倍になることが解っています。代表選手の決定力不足が深刻ですが、決定力は10代にどれだけゴール前の決定的場面でのシュートを経験するかで決まると言われています。

マスメディアでは代表チームの決定力のなさを日本人の精神構造の問題と結びつけたがる人がいますが、そういう議論の前に、実は単純に出来ていなかったことがあるのです。

以上はどちらかというシステム

養成コースには毎年かなりの投資をしており、コース数も格段に増やしていますが、まだ十分ではないと認識しています。

西松会会員の皆さんはサッカー経験者です。是非ともコーチングライセンスを取って頂いて町のサッカーコーチの一翼担って頂ければと願っています。現在C級D級ライセンスの講習会は各都道府県協会

で実施しており、D級は土日の2日間

で取得できます。C級も一週間の合宿コース以外に週末コースがあり、毎週受講すれば3か月ぐら

いでライセンスを取得できます。

40代までの方はぜひ挑戦してみてください。実技は体力的に多少きついです

6. 日本女子サッカーの台頭

因みに最後にひとつ良い報告があります。日本の場合女子代表の方が早く世界のトップレベルに仲間入りする可能性が高そうなのです。

今ユース年代の世界大会における日本の女子選手のプレミアの質の高さが注目されています。FIFAのテクニカルスタディグループは昨年の世界の女子サッカー界におけるサブライズは日本であつたとコメントしています。

また昨年行われたFIFA女子U17 W杯の MVPは岩渕真奈ちゃんという小柄な日本の女子高生です。FIFAの世界大会で日本人が MVPになったのは後にも先にもこれが初めて

の快挙です。彼女がフル代表で活躍し始めるころから日本女子代表はマスコミにも注目されるはず。

この子はめっちゃくちゃうまいですよ！

また彼女以外にも才能ある女子選手が育つてきています。

皆さん、是非スペクタクルなサッカーを始めた女子代表にもご注目ください。

新規参加を歓迎―関東西松会有志の会

●この会は、戦争直後から「戦後は終わった」といわれる1950年代末頃までの厳しい社会状況の中で、乏しい体力・戦力で関東リーグでの生き残りをかけてボールを蹴った仲間たちの懇親を図ろうという話がきっかけとなり、25年前にスタートしたものです。小平での泣いたり笑ったりまたは迷いもあつたであろうこの部活に限りない共感と郷愁を覚えるのは、別にシニアだけでなく年代を超えて共通するものでしょう。

なお現在は、これらができるだけ多

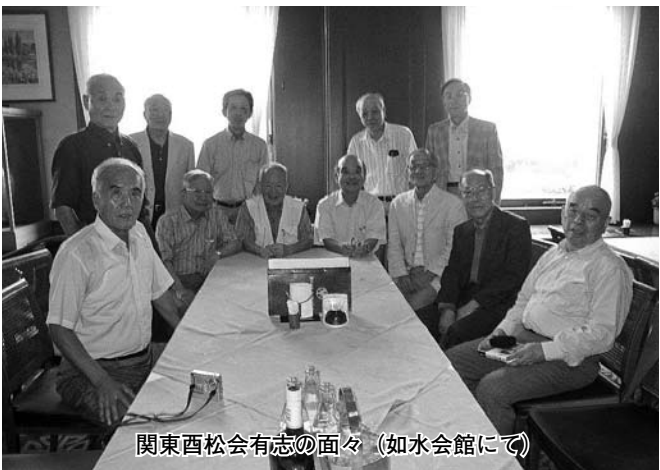


関西では、お世話役の佐竹先輩のご尽力により、毎年春、秋の有志懇親夕食会を継続しています。

特に2009年は、8月1日に神戸大学で三商大戦があり、有志が応援に行き10月の懇親会はその話題で盛り上がりました。

三商大戦当日の関西地方は明け方から豪雨で、小平なら恐らく水が溜まってプールになっていたでしょう（40年前によくグラウンドの水かきをしたことを思い出して申し訳ありません）が、神戸大学六甲台グラウンドは水はけがよ

くの仲間とシェアしたいと願いながら、毎年この有志の会を開いています。新規の方のご参加を歓迎します。



関東西松会有志の面々（如水会館にて）

●平成21年は、7月24日「橋クラブ」「葉の間」にて、下記12名の出席で昼食懇談会の形で有志の会が開かれました。

出席者・・外岡（昭和23）、高田菊（28）、神代（29）、石井・高田勝（30）、志摩・中岡・橋本・松丸（31）、浅井・佐竹・中路（32）

各自の近況報告として、母校現役からW杯にいたるサッカーの話にはじまり体験的健康・病気の所見や昨今の政治・経済の論評に及んだ日頃の纏蓄のあるところが披露されました。（この延長戦は例によつてバーラウンジにて行われました。）
本年は6〜7月頃の開催を予定しています。

●世話人・・松丸 鉦市（昭和31年卒）
連絡先（Tel / Fax）
045（351）1163

（E-Mail）matumaru@aol.com

く、試合開始時には小雨となり、グラウンドには若干の水溜りは残つたものの現役のすばらしいプレーを見させていただきました。

結果は3大学とも1勝1敗でしたが、得失点差で残念ながら優勝できませんでした。最近1日に2試合の総当たりで、現役もAチーム、Bチームに分けて2戦しましたが、特にAチームのレベルは高く、某先輩によると当時の関東リーグ1部程度の実力はあるとかということでした。

その後のOB戦でも東京からの応援も含め、一橋OBで1チーム構成できたのは、神戸、大阪市大が混成でようやくチームができたのを見ると、やはり、わが一橋の団結力を感じます。

試合後は近くの焼肉屋で、大倉さんからのおいしい日本酒の提供もあり、現役代表との懇親会で大いに盛り上がりました。個人的には、その後は場所を変え、東京からお越しの種田副会長と学生時代 以来40年ぶり

寄付回りで密な人間関係を

昔は先輩の所へ行って寄付を貰うのが当たり前だった。

先輩としては現役の学生から話を聞くのが楽しみでもあった。

学生も会社や家庭を訪問して、その仕事振りや雰囲気を知る事も社会勉強になるはずだ。

今は振り込んでくれという事だが、私は絶対振込みでは出ずがない。

人間関係が希薄なほうが気が楽と言う風潮はおかしい。この世の中に人間関係を抜きにして出来る仕事があるのか。

先輩は多いと思うが、部員も多いのだし、春休みや夏休みを利用すれば出来ないことも無いと思う。地方の先輩には帰郷する学生が行く事が出来るし、外国だって行く学生も多いだろう。

私としては寄付を取りに来た学生の顔と名前と覚えていると練習や試合を見に行つても、熱が入る。

老来不精になつて、小平に行けなくても、その男がどんな進路をとるかは、名簿（遠慮せずに出すべきだ。日比谷高校などは3年に一度、平成20年度に出しているから、

23年度に出るだろう）でわかつて面白いものだ。

芝白金の私の生れたところの通りの入り口に渡辺甚吉大先輩の家があり、サッカー部の孫の人がいたことがあった。銀行に入つたかと思うが、この新聞を見たら遊びに来たか欲しい。昔の部誌を見ると、色々のことが分かつて面白い。

奥村 一郎（昭和21年卒）

シニアのチーム活動を拡大

西松会の副代表幹事として現役・OB交流の仕事に携わり2年がたちました。新年のOB戦や、三商大戦への企画・参画以外に、東大・京大OBとの交流戦なども積極的に推進中です。日頃の皆様のご協力に感謝を申し上げます。活動を振り返って自己評価ですが、まだまだ道半ば、上には上がある、との実感です。

東大OBの活動はウェブサイトで見ることが出来ますが、一般社団法人として年代別にチームを作り活動中です。若手は東京都リーグに参加し、50代、60代もチームができています。秋に交流戦を持たせて頂いている東大OBチームは昭和51年のOB中心で

「部史」と「部誌」のデジタル・アーカイブ化

1921年に東京商科大学ア式蹴球部が発足してから、はや90年になろうとしている。商大、一橋大学の運動部では、ボート部、剣道部、柔道部、庭球部などが既に百年の歴史を閲し、それぞれ「百年史」の刊行をしている。これらの伝統ある部が競って「百年史」を編纂しているのは、単なる記録の保存のためではない。その百年の歴史の中でそれぞれの部員が情熱を燃やして相手部と覇を争い、「心技体」の鍛錬に勤しんだ思い出を共有出来る資料として「部史」が存在するからだと思ふ。

百年と言う期間は人間の世代で言えば親子、孫、曾孫の三代から四代に相当する。小生は1953年から4年間の部生活をしたら、わがサッカー部を創設された第一世代の人達の子供世代に相当する。この世代の間には第二次世界大戦が存在し、わが部も栄光の

すが、数年前まで、ほとんど単一学年のOBでリーグ参戦していました。京大OBチーム、男組との定期戦は昨年からはまりましたが、一橋、東大との連合チームで戦い未勝利です。男組は、ほとんど毎週試合を組まれているようですが、50歳以上の部員だけで30名は超えています。60歳以上の得点も目立ちます。

ローマは一日にして成らず、であり東大、京大を手本に、着実に一步一步進んでいくしかないと思います。20代、30代は会社のサッカー部が忙しいでしょうから、40歳以上のシニアで、40代、50代、60代のチーム活動を少しずつ始められればいいですね。運営には裏方の仕事も出てまいりますので、引き続き、皆様のご理解とご協力を頂ければと思います。

シニアサッカー人口は、フットサルも含め年々増えているように感じますが、根底にはボールを蹴る楽しさがあると思います。ボールを蹴る楽しさを堪能しながら、OBの縦、横の繋がりを再認識できれば、最高だと思っています。今年も微力ながら皆様のお手伝いをさせて頂く所存ですので、宜しくお願い致します。

（昭和57年卒、日本GM勤務）
倉崎 嘉幸

れた「部誌 蹴球」よく読んで貰い、第一世代の人達の思いを理解し「サッカー部百年史」編纂の参考資料として欲しいということである。

しかし、「60年史」や「部誌」を紙媒体で大部のコピーを作ることは費用も多額になるし、「部誌 蹴球」の主将相伝での継承も「よく読まれていない」実態がわかつた事で得策ではないと判断される。むしろ現在のIT技術革新を反映した、デジタル・アーカイブ化を図りDVDディスクなどで安価にコピーを作つて、多くの部員に同時並行的に読んで貰う様にした方が部員の「心技体」の向上の参考にもなり、より効果的ではないかと考えた。

この具体的なやり方については、小生の腹案を西松会幹部と現役学生に示し、現役学生の協力を得て是非実現したいと思つている。

中路 信
（昭和32年卒）

2回の懇親会と三商大戦応援―関西西松会

入学試験で教室が同じだった君

昨年末に「西松会新聞」に田中氏の追悼のスペースを割くので、原稿を書いて欲しいとの依頼を受けて、快諾しました。ここでは追悼に加えて同期生の動静も述べたいと思います。

田中豊二氏への追悼

昨年10月24日の昼過ぎに山口氏社会福祉協議会の総会から帰宅すると、田中夫人宏子さんから留守電が入っていました。これがご主人・田中豊二氏が亡くなられたという報せでした。

平成20年の夏の「西松会有志の会」だったでしょうか？彼が「癌」に取りつかれたということとを漏らしてくれました。

以来、時々の便りで消息を聞く元気な返事が電話でかえってきていたので、安堵していたのが実態でした。

振り返ってみると、大学入学試験では50人位の同じ教室でした。私は商学部の方、彼は経済学部の最初の方であつたからです。

たまたまサッカー部に入ることが付き合いの始まりでした。

社会に出てはお互いにそれぞれ紆余曲折がありました。が、最後に残してくれたものが、「朗読劇」というものです。平成元年暮れに「第一回キリンリーダーシアター」として、山口県の宇部市と山口市で公演されました。その後、山口県内ではこの実行グループがそれぞれに活動しています。

この原稿を書くに当たって、奥様に次のことを照会しました。「法名『釋雅豊』「病名『胆管腫瘍』「病院

「N T T 東日本関東病院」ということでした。また、墓所は麻布山善福寺（港区元麻布1―6―21）にあります。合掌

同級生の動向について

私たちは昭和25年に一橋大学に入学し29年に卒業しました。私は昭和28年度のキャプテンを務めました。

しかし同じ年度に入学して、一緒にボールを蹴った仲間が卒業できずに途中で鬼籍に入つた者がいます。

彼の名は「本田忠勝君。法名『本覚忠勝居士』です。命日は昭和28年1月28日です。私は昭和28年夏に墓参に伺つた記憶があります。

また、「西松会会員名簿」には6名の名前が載っています。が、前記、田中氏のほかに、森康全氏が平成18年に、高末隆氏が同20年に亡くなりしました。

従つて残っているのは宮田幸三君、山下誠一君、私の3名となりました。何れも平均寿命前後の高齢者ですが、長く生命を保つて欲しいものだと思つています。

神代 祥男（昭和29年卒）

田中、大野両氏を偲んで

追想 大野章雄君のこと

大野章雄君が昨年9月6日卒然として彼岸に旅立つてしまった。闘病中にもゴルフコンペに優勝するなど元気な様子を伝え聞いていただけに意外の感に打たれ、しばし言葉もない思いだった。

大学時代の4年間サッカー部で文字通り苦楽をともにした仲だった。ことに4年生のシーズンには成績不振で入れ替え戦を戦うこととなり伝統あるチームとしては大変な苦境を迎えてしまった。幸い部員諸兄の奮闘により2部残留が決まつたときは心からほつとしたものである。

このときは大野君も4年生の一員として試合に出場、おおいに奮闘し勝利に貢献してくれたことには今でも感謝の気持ちで一杯であり心から有難うと申し上げたい。なおこの大切なときに足を痛めて自宅で過ごすという不本意な体たらくになつてしまつた自分を慰めてくれたことも忘れられない。

また2年生の夏季休暇には大野君を誘い10日間ほどの北海道1週旅行にかけた。ユースホステルや会社の寮などに泊る貧乏旅行だったが、快く付き合つてくれ、お陰で楽しい思い出を刻むことができた。帯広では新婚の姉の家にも1泊し十勝平野の牧草地で当時は珍しい羊肉でジンギスカン焼きをたらふく食べたのも良い思い出である。その姉夫婦も昨春金婚式を迎えたとの便りがあり、このことも大野君に話そうと思つていたが今はそれもかなわぬこととなつてしまつた。

お互い会社生活や家族のこと趣味のことなど話せなかつたこともたくさんあるが、やがて訪れる再会のときにゆっくり語り合おう。

梅田 清（昭和37年卒）

「占いの書（今年はどんな年？）」

気持ちは若いつもりだがあつという間に大学を卒業して20年になつてしまった。

おじさんらしく学生さんの部員や若手の社会人諸君に説教させてもらつと、「古典を読み」だ。興味わなくなつても歳とつて興味わいたときに読めるくらいに教養と技術は養つておいて欲しい。社会人になつてからの古典を読む技術の習得はなかなか難しい。若いうちに基本的な古典の教養は身に付けて欲しい。と偉そうに言わせてもらつた。私自身古典に興味があつたのは恥ずかしながら、経営をするようになった30代からだ。それまでは古典など全く興味がなかつた。古典は経営者や精神的に自立した「大人」になつてはじめて価値のわかるものではないかと最近思う。

そこで古典などに興味をもつてもらつたために『易経』や『老子』の道教などに関連した干支の話を少しに書かせてもらおう。

今年の干支は庚寅（かのえとら）。白川静「字統」によると、「庚とは両手で杵を持つて穀物を脱穀している形」とあり、「寅は両手を持つて矢の局面を正す形」とあり、おそらく神事に関係のありそうな解釈が出てくる。しかし字義からの示唆ははつきりしない。

一方陰陽からの解釈をすると、庚は「陰」の収縮作用を言う。寅は「進む、または憤む」という二つの意味を言う。そこで庚寅は60年間続いていた秩序の崩壊が前年にはつきりして新しい秩序が始まる歳であり、かつ秩序崩壊の中から新しい秩序が生まれきて、まだまだ世の中暗い中、少し光明となるようなことが見えてくるのが庚寅の歳まわりであるということができよう。他方、昨年の己丑（つちのとうし）は旧秩序が崩壊の姿をはつきり見せる歳まわりだ。皆さんご存知のとおり昨年の己丑に自民党政権が崩壊した。グローバル資本主義経済が行き詰まりを見せた年でもあつた。

それでは今年はどうなるのだろうか。それを見る前に過去の庚寅にはどんなことがあつたのだろうか？まず60年前の1950年は朝鮮戦争が勃発した年だ。朝鮮戦争によつてGHQの日本占領政策が

変わり、日本を共產主義の防波堤へとする枠組みが決まつていった年といえる。朝鮮戦争特需により経済が回復の兆しをみせたのも歴史の教科書にも載っているような常識だ。また米国ではレッドパージが本格化し米ソ対立という戦後のスキームがはつきり始めた年でもある。そのさらに60年前の1890年はビスマルク引退、教育勅語の制定、第一回衆議院選挙などがあつた年である。薩長中心の人事による政府から政党中央の政府に移つていく過渡期であつた。さらにその60年前の1830年はフランス7月革命である。このように庚寅は次の60年を規定する重要なパラダイムが出現すると同時に今までの混乱を少し和らげる事件が起る年でもある。

現実ですでに庚寅の年を象徴するような事象が起き始めている。まず言わずと知れた民主党による政権、これが2大政党制へ進むのか、長く続く混乱の序章なのかまだ定かでないが、次の60年のスキームのキーファクターになるだろう。またC O P 15でのスキームなども今後の経済活動の枠組みを大きく規定する可能性は高い。また米国では行き過ぎたグローバルイズムの反動としてメガバンクへの規制や行過ぎたアルゴリズム取引への規制の議論が始まつている。

まだまだいろんな事象の中からどれが次の60年間のキーファクターになるかわからないが今年、庚寅に起こる事件をそういう視点から見るとまた合コンなどで濫蓄を垂れることも出来るのではないだろうか。（でも本当に濫蓄垂れると嫌われるので要注意）

林 道雄

（平成2年卒、オーティック社長）

同期と月に一回のフットサル

西松会の皆さま、初めまして。平成19年卒の桜井と申します。現役時代はG Kとしてプレーしており、4年時には副主将をやらせて頂いております。

今回西松会新聞に執筆させて頂くということで、私の近況をご報告させて頂きます。現在私は三井住友銀行で勤務しております。広報部という部署に所属しております。広報部では新聞やテレビへ出稿する広告の作成について広告代理店の方との打ち合わせや新聞・雑誌の記者からの取材依頼等のマスコミ対応に従事しております。元々は営業を志望して入行したことに加え、大学時代、広告や広報について学んだ経験もなかつたため、配属された時は不安だらけでしたが、入行から約2年経ち、やつと業務にも慣れてきたかなと思います。

ここで話は変わります。サッカーの話させて頂きます。現在はどこかのチームに所属している訳ではないため、ボールを蹴る時間はかなり減つてしまいました。しかし、大学時代の同期を中心とした有志で1カ月に1度、フットサルやソサイチ（7人制サッカー）の大会に出場しております。運動不足を解消する良い機会となつているのは勿論ですが、それ以上に大学時代の仲間と定期的に会い、共に思いつきりボールを蹴ることで、日々の仕事から離れ、気持ちをリフレッシュすることができています。今後も貴重な機会として続けていきたいと思っております。

まだまだ未熟者ではございますが、今後もし指導ご鞭撻の程よろしく願ひいたします。

（平成19年卒、三井住友銀行勤務）



寺西先生(元部長)の紫綬褒章受章を祝う

昨春秋の褒章で、サッカー部OB（昭和40年卒）でサッカー部部長を務めて頂いた寺西重郎・一橋大学名誉教授が紫綬褒章を受けられました。その祝賀会を12月4日、部長時代に特に世話になっていた昭和49年卒から53年卒までの23人が出席して、如水会館で開催しました。会には先生の奥様、お嬢様もお招きし、楽しいひと時を過ごしました。

東京地区だけでなく、一番遠くは神戸からの参加。やむなく出席できなかった人からは、携帯電話でお祝いとお礼が寄せられました。一方、大学卒業以来の再会というケースもあり、メタボ気味の体型や、薄くなったり、白くなった髪から、面影探しに苦労したり、逆に当時のままの容姿に驚かされることもありました。

それでも、すぐに「今回の受章理由は、サッカー部部長としてのスポーツ貢献では」という冗談も飛び出すにつれ、気分はいつのまにか小平でボールを蹴っていた、学生時代に戻っていました。

本来の趣旨からすれば、金融論の大家である寺西先生の業績を称えることが最優先されるべきですが、実態は「学問上



寺西先生ご一家を囲んで、気分は学生時代に

の業績はさておき、部長だった昭和50年前後にお世話になったお礼の会。しかし、現役時代に大学近くの官舎まで押し掛け、食事やお酒までご馳走になっていた時のように、主賓であるべき寺西先生が、ホスト役を務める場面も多かったようです。

なお、お酒好きの先生だけに、「お酒だけはよいものを用意しました」という気配りに加え、褒章受章者の発表から短期間で祝賀会を設営するなど、年末の多忙な時期に尽力してくれた幹事団に対し改めて感謝します。

大島 正
(昭和49年卒・中日新聞社監査役)

OB・地域・会社でサッカーおじさん

卒業して30年以上経ちますがいまだにいろんなところでサッカーを楽しんでいます。

1. 関西での京大VS一橋・東大OBチーム

日置君（昭和56年卒）の呼びかけで関西在住の40代・50代のメンバーで東大OBとチームを組んで京大OB（男組）と数ヶ月に一度程度試合をしています。京大チームは地元でもあり、毎回2チーム以上の参加者があり、練習量も豊富で過去私の出た3試合はいずれも大敗に終わっています。学生時代は対戦相手だった東大チームと合同チームを作ってサッカーができるというのも不思議で毎回試合後の懇親会とさらには梅田での飲み会を楽しんでいます。現在名古屋地区在住ですが大阪までは新幹線で1時間とかららないので気軽に出击しています。

2. 団地のシニアチーム

私が住む多治見市のホワイトタウンという団地に住むおじさんを中心にチームを作り活動しています。団地にはホワイトキッカーズという少年チームがあり、全国大会でもベスト8に入ったことのある強豪チームですが、この親がメンバーの中心で、チーム名は脇之島ブランパスといっています。脇之島は町名ですがブランパスはブラン・パシヨネ（フランス語で白い仲間）と名古屋グランパスをも

昭和61年組が全員揃い踏み

海外や地方勤務のメンバーがいて、ここ10年近くなかなか全員が揃うことがなかった昭和61年卒業組でしたが、昨年10月4日(日)に懐かしの大勝軒のおじさんを囲んで、8人（北山・入部・谷口・幸松・村上・福田・釣田・桑原）全員が揃った同期会を国分寺・北口の居酒屋で夕刻から開催しました（大勝軒はまだ営業しています。おじさんも元気です。店は卒業当時よりちよつと南に数十メートル移動しています）。

福田くんが現れず、あわや全員そろわずか、入部くんの結婚式の時みたいに日程間違えドタキャンか、と思った8時過ぎ、すまんすまんと登場しました。

桑原 隆人
(昭和61年卒、三井物産勤務)

じつにつけたものです。年間20〜30試合くらいを行っており（私は半分弱しか出られませんが）、数年前はタイ遠征を行い、今度は韓国遠征を計画しています。中には素人もいるのですが、日大や関学のサッカー部OBもいて時折昔話に花が咲くこともあります。

3. 会社のフットサルチーム

会社（三菱重工／三菱航空機）のサッカー好き仲間と1年程前からチームを作り楽しんでいます。私が最年長で若い人、女性もメンバーになっています。対戦相手は社内だけでなく、社外との交流もあり、現在三菱商事中部支社と交流戦をおこなっています。三菱商事チームには東大や慶応のサッカー部OBがいてこれも楽しくやっています。

ということでサッカー小僧からサッカーオジサンになった今も気持ちは変わらず、たまには学生時代のノリで走り回り、後で動けなくなることもあります。世代・性別・職業を問わず、国境を越えても一つになれるサッカーの魅力はいまさらいう必要ありません。東京での現役の応援にはなかなか行けませんが、人生の中でも最も濃い4年間を過ごしている現役の皆さんの活躍を願っています。

五座 哲也
(昭和54年卒、三菱重工業務)

転勤の連続もサッカーが助け舟



西松会の皆様、如何お過ごしでしょうか。

もう昔の話となつてしましますが、サッカー界の活気と勢いに導かれるようにJリーグが開幕し、誰もが「KAZUダンス」に興奮していた1993年、私は一橋大学サッカー部に入りました。

中学時代はバスケット部、高校時代は水泳部と、本格的にサッカーをやったことはなく、なぜサッカー部？と当時はよく聞かれましたが、この決断はJリーグブームに加え、チームスポーツへの憧れ、そして体育会でもそこそこやれるんじゃないかとの自負（勘違い）によるものでした。

現役時代は最終的にはレギュラーになれませんでした。グラマネの先輩方のご指導もありベンチ入りするところまではいくことができました。ただ、これらの軌跡が思い出深いことは間違いないですが、それ以上に大学を卒業してからの生活において、大学時代に習得したサッカーは貴重なものを私に与えてくれています。

卒業後、これまで千葉↓大阪↓東京↓香

韓国との交流で強豪に变身

北区の宿舎から生家の熊谷に引っ越し2年。職場まで2時間の小旅行となり、週末、東京近郊でのサッカーに参加するのはあきらめた。ちよつど寄稿の機会を頂戴したので、紙面を借りて職場サッカー部の活動をご紹介します。

銀行の方々は御存知かも知れないが、財務省サッカー部はインターバンクリーグに所属し、主活動はそのリーグ戦である。旧大蔵省時代に、旧開銀などの力添えを得てお願いし、以来、厚かましくも同リーグに参加させて頂いている。とは言え、長らく最下の3部のどん底で、白星献上のためだけに存在しているような状況が続いた。筆者人省時でも、毎週選手確保が綱渡り、欠員で黒星となることもあった。

転機は韓国企画財政部（財務省）との間で交流親善試合を始めた10年前。一回りは年長かという韓国チームにあつさり2敗したのを契機に、選手確保、金曜深夜の痛飲回避を進め、3部リーグ優勝（平成15年）↓2部リ

グ準優勝（平成17年）↓奇跡の1部昇格、を果たした（1部は我々にはレベルが高すぎ、辛くて楽しめない現実にも直面したが・）。最近では2部辺りをうろうろしている。

韓国財務省との交流試合の方は、昨年ついに10周年を迎えた。筆者は初回時、たまたま海外勤務帰りのつたのを買われてキャプテンに就き（韓国チームとの意思疎通係）、以来、数少ない皆勤賞を達成している。引越しを機に、昨年の第10回記念試合で、キャプテン職とレギュラー一線から退いたが、今夏も副団長として訪韓し、サッカーと爆弾酒を通じて、1年ぶりに韓国チームと旧交を温めるつもりだ。

大学時代に活躍した記憶は皆無に等しいが、かように充実した社会人サッカー活動を送つてくれたのも、一橋大学アス蹴球部で培つた、基礎（体）力、チーム一体で勝利を喜び合う心構え（フルマ二百キロ走の春休み、両ゴール裏周回のウインド、弱小Cチームキャプテンの夏合宿は今でも回顧する）のお陰と感謝する日々だ。

森田 稔
(平成5年卒・財務省勤務)

編集後記

2号にご寄稿いただいた緒方徹さん（昭和49年卒）から関東2部への昇格を決めた試合の会場を「西が丘」としたのは記憶違いで、実際は「浦和の駒場サッカー場」でしたとの連絡がありました。そういえば記憶に間違いがなければ小生の頃は「西が丘」は入れ替え戦（降格）の球場でした。

日本サッカー協会国際部長の松永さんからは、世界の潮流の中で日本サッカー界が抱える課題と改革の方向をご紹介いただきました。現役陣にも参考になるはずですよ。

寺西先輩の受章祝賀会、同期会と会員間の交流も活発、ロンドンからはイモケンさんの元気な便り。西松会は多彩です。

(昭和41年卒、相良 保彦)